

「ふくい2030年の姿」における記載について

	ふくい2030年の姿（平成17年3月）	ふくい2030年の姿・II（平成21年3月）
環境と共生する社会に向けての課題	<p>【視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大量生産、大量消費、大量廃棄型社会から「循環型社会」へ転換 ・環境への意識が高まり、新たなビジネスチャンスが創出 	<p>【視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化石燃料を中心とした炭素社会から水素などの新エネルギー社会へ転換 ・世界中で原子力発電の依存率が高まり、福井の原子力技術が貢献
	<p>【特徴的なデータ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主要国の環境保護優先意識（2001年）：経済・雇用よりも環境が優先 日本：34.0% ドイツ40.6% 中国：51.8% アメリカ：58.9% 出典：電通総研・高橋徹著「日本人の価値観・世界ランキング」 ・日本の発電電力量：1,630億 kWh（1965年度）→9,447億 kWh（2002年度） 	<p>【特徴的なデータ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の電源構成：原子力発電 34.3%（2000年度）→49.1%（2030年度推計） 新エネルギー 0.2%（2000年度）→3.5%（2030年度推計） ・世界の1日1人当たりの生活用水の需要見通し：1740（1995年）→2130（2025年）
	<p>【2030年のふくい】</p> <p>○世界の知恵が集結する原子力産業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原子力発電所の集積立地による技術・ノウハウの蓄積を活かし、原子力・エネルギーに関する研究開発拠点への転換を進め、様々な研究や研修を実施できる環境を整備 ・東アジア諸国の経済発展に伴い、国境を越えた環境問題が深刻化。環境を守るために福井の原子力技術を積極的に移転し、アジアの原子力産業をリード <p>○自然素材型社会の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化石燃料から植物由来原料や太陽光、地熱エネルギーを活用する「自然素材型社会」を実現 ・自然環境や生態系に影響を与えている化石燃料の消費やコンクリートの使用を低減 ・不法投棄など自然を汚す行為を防止するパトロールなどを自主的に行う地域社会が実現 ・CO₂等の排出量の抑制に向けて、民間や地方公共団体が一体となり、具体的な数値目標を設定して改善を実施 ・使った後自然に帰る植物由来原料を活用した製品の開発・普及 ・生産から消費・廃棄までの環境影響を考えた製品開発が企業の社会的責任（CSR）として定着 ・農業用水路における小規模水力発電や地熱による歩道融雪、雪の冷熱エネルギーによる農産物の貯蔵など自然エネルギーの利活用システムが低コストで実用化 	<p>【2030年のふくい】</p> <p>○エネルギー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・容量小型電池が送電線に代わる実用的なエネルギー輸送方法の一つとして普及し、自動車、電車、船舶などで利用 ・エコロジー教育等により、県民のエコロジカルな行動や省エネルギーが進展 ・エコハウスの考え方が浸透し、太陽光発電と燃料電池を併用した家庭での電力の自給自足が普及 ・バイオマス燃料車が普及し、稲わらや間伐材など、福井で生産される農林業副産物を原料としたバイオエタノールを生産 <p>○自然・環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グリーンツーリズムや緑の親戚（※）の普及などにより、山や林の重要性が高まり、林業の役割も見直される <p style="font-size: small;">〔※緑の親戚：農家が都市部生活者におすす分け感覚で農作物等を提供し、都市部生活者は感謝の心で農作業等を担う制度。農林水産業を通じた新たなつながり 「ふくい2030年の姿検討会」の造語〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界的な水不足が問題となる中、福井の技術が世界の水不足解消に貢献 ・「植栽の里親」制度により、路側緩衝帯が緑の豊富な前庭として整備 ・地域に住む動植物の「自然環境マップ」を作成するなど、自然環境を記録する活動を展開 ・環境保護に取り組む企業が売上げの一部を寄付する制度が確立

